Usefulness of human papillomavirus detection in oral rinse as a biomarker of oropharyngeal cancer.

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2017-11-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 博, Yoshida, Hiroshi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00049028

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

論文内容の要旨及び審査結果の要旨

受付番号　医薬保博甲第105号　氏名　吉田　博

論文審査担当者　主査　川尻　秀一

副査　市村　宏

村松　正道

学位請求論文

題　　名　Usefulness of human papillomavirus detection in oral rinse as a biomarker of oropharyngeal cancer

掲載雑誌名　Acta Oto-Laryngologica　平成29年掲載予定

ヒトパピローマウイルス(HPV)は、子宮頸癌の原因ウイルスとして知られている一方で、近年では中咽頭癌との関連が指摘されている。HPV陽性中咽頭癌は増加傾向にあり、本邦では現在中咽頭癌の約50%がHPV関連であると言われている。HPV陽性中咽頭癌は、早期発見や、再発診断が難しいことがある。そこで咽頭うがい液という簡便な方法でのHPV検出が、中咽頭癌のバイオマーカーとなり得るのではないかと考え、本研究を企画した。

19例の中咽頭癌患者を含めた頭頸部疾患患者110例を対象に、咽頭うがい液と口蓋扁桃擦過検体を採取し、GP5+/GP6+ auto-nested PCRにより、HPV-DNAの検出を行った。また、中咽頭癌に関しては、p16免疫染色やHPVタイピング、治療後の追跡調査等を施行した。

中咽頭癌、中咽頭癌以外の上気道癌、その他疾患におけるHPV-DNA陽性率は、それぞれ咽頭うがい液では、19例中9例(47.4%)、47例中8例(17.0%)、44例中7例(15.9%)であった。中咽頭癌19例におけるHPV-DNA検出とp16免疫染色結果との比較では、p16陽性12例中、咽頭うがい液では9例(感度75%)、口蓋扁桃擦過では10例(感度83%)でHPV-DNA陽性であった。p16陽性中咽頭癌におけるHPV-DNA陽性率が75%と過去の報告(39-54%)と比べ、高い結果になったことから、auto-nested PCRの有用性が示唆された。また、治療前に咽頭うがい液中HPV-DNAが陽性であった9例のうち8例において、治療後にもうがい液を採取でき追跡したところ、8例中7例においてHPV-DNAは検出されなかった。このことより、治療後のうがい液中HPV-DNAは、病状を反映することが示唆された。HPVのタイピングに関しては、HPV-DNAが陽性であった42検体中14検体(35.0%)でタイピング可能であった。

以上の結果から、GP5+/GP6+プライマーを用いたauto-nested PCRは、中咽頭癌におけるうがい液中HPV-DNA検出に有用であること、HPV陽性中咽頭癌では、うがい液中HPV-DNAの検出は診断において有用であること、治療後のうがい液中HPV-DNAは病状を反映することが示唆された。

本研究は、中咽頭癌におけるうがい液中HPVの検出およびその診断の有用性を明らかにしたもので、価値ある労作として学位論文に値すると評価された。